

原 著

初期のインタビュー場面で生じたインタビュアーの 逆転移とインタビュイー理解

性同一性障害と自認する若者とのメールの質的分析を通して

安達圭一郎

Interviewer's countertransference and understanding interviewee image occurring in
an early interview session.

— From qualitative study of E-mails corresponding with an adolescent who recognized
him/her self as having “Gender Identity Disorder”

Keiichiro ADACHI

本研究では、性同一性障害（Female to Male）と自称する青年（A）とのメールを通じた初期のインタビュー場面で生じたインタビュアーの逆転移とインタビュイーイメージの変遷について検討することを目的とした。インタビュアーは性同一性障害と自認する若者とは初めての関わりであったため、インタビュー開始前から多くの文献を参照し、一般的な性同一性障害当事者達が置かれている境遇とそこにおける彼らの生きにくさに注目して関わった。こうした間接的な逆転移は、その後のA理解に大きく影響し、インタビュアー側の「焦り」「無力感」「怒り」といった逆転移感情と結びついたAイメージを生成した。さらに、そのことは、インタビュー構造の崩壊とインタビュアーのエナクトメントをも引き起こすことになった。しかし、Aのメールを転機に、インタビュアーは自己の逆転移感情に気づき、全体的対象としてのA理解が可能となった。こうした経緯を、やまだ（2007）の対話的モデル構成法を援用して質的に検討した。

キーワード：逆転移，インタビュー，質的研究

問題及び目的

始めて逆転移の概念を提唱したFreud（1910 小此木 1983）は、逆転移をクライアント理解やクライアントに対する適切な働きかけに対して妨害的に作用する治療者側の心的状態とした。そこでは、逆転移の克服がその後の治療展開に必須の作業であるとされたのである。その後、Heimann（1950 椋田訳2003）、松木（1989）は、治療者の逆転移を治療妨害的要因のみならず、深いクライアント理解（例えば共感など）における重要な体験と位置づけ、内省することによって得られた逆転移内容を治療場面に有効に活用することの意義について述べた。しかも、治療者が患者との相互作用の中で感じるあらゆる心理的反応（治療者自身の個人的な経験に端を発する感情も含めて）を逆転移として取り上げたのである。

さて、これまで、こうした逆転移とクライアントの内的変化の推移に焦点をあてた論文では、長期にわたる心理療法過程を大胆に圧縮し事例研究的に報告される場合が大半であった。しかし、筆者のこれまでの経験を辿ると、一方では治療者の逆転移は些細なクライアントの一言や治療場面外のエピソード等によって短期間の内に変動することが多く、長期間にわたる研究手法では、そのダイナミズムについて十分に報告しきれないというジレンマがあった。

今回、筆者は、性同一性障害（Gender Identity Disorder；以下、GIDと略記）と称する若者A（Female to Male）に対してメールによるインタビューを行う機会を持った。心理面接とは異なり、メールを介在としたインタビューは、短期間かつ間接的な関わりであるが故に、インタ

ビューアーの態度は比較的中立性が維持されやすい状況にある。しかしながら、振り返ると筆者はインタビュー期間中にさまざまな感情体験を味わった。しかも、筆者の感情体験は時に A 理解を阻害し、インタビューそのものが筆者の一方的な思いこみのまま進行した。さらに、こうした筆者の感情を A に開示することで、A の全体的理解へと進展するという経験をもつに至った。

本研究は、短期間のしかもメールのやりとりという治療場面とは全く異なったセッティングの中で生じた筆者の感情をあえて逆転移と捉え、その変遷について、双方の語りや筆者の内省資料を材料とした質的研究を行うことを目的とする。ここで、メールを介在としたインタビューで生じるインタビューアーの感情体験と心理面接において治療者に生じる感情体験を同列の逆転移と捉えることには、もちろん異論もあろう。しかしながら、比較的中立性が維持されやすい状況であるにもかかわらず、初心者と変わらない初歩的な理解の齟齬が生じたという事実そのものは、経験や面接構造を問わず、治療者あるいはインタビューアーなら誰もが経験する可能性を示唆するものである。つまり、治療を意図した面接が否かを問わず、日常生活レベルで他者との間で体験する感情は逆転移の文脈で把握可能と考えられるのである。従って、こうしたミクロな内容について、語りを詳細に検討することを旨とする質的研究の手法を援用しつつ報告することは、心理面接におけるミクロな逆転移の変遷を理解するうえでも意義ある試みと言えないだろうか。

さて、質的研究は、やまだ (2006a ; 2006b ; 2007 ; 2008) の一連の論考にあるように、1990年代のナラティブ・ターンという認識論的変革に基礎づけられる。そこでは、従来の客観主義的な実在論への懐疑や観察者と被観察者との相互作用、さらにはそこで紡ぎ出される意味や物語が重視される (莊島, 2007)。特に、やまだ (2007) の「対話的モデル構成法」は種々の場面 (世界) におけるナラティブ相互の多重対話性に注目する。

今回の筆者が行おうとする分析は、インタビュー場面で繰り広げられる、今、ここでの相互対話 (メール) 場面における語りから構成された、きわめて主観的世界である筆者の逆転移への

注目である。そのことは、インタビューという相互行為のフィールドで語られたインタビューーの人生物語に、逆転移という理論モデルを重ねる中で生成される筆者自身の逆転移物語とインタビューーの自己物語への注目とも言い換えることができる。

方法

インタビュー : A

筆者の勤務する大学に在籍する女子学生 B から、生きにくさを持つ若者 A を紹介された。B は元々交友関係が広く、学内外を問わず多くの人々と出会ってきたメールを行っていた。その中に、GID と称する若者 A が含まれていた。B と県外在住の A との間には直接の面識が一度もなく、専らメールでのやりとりで交流が行われていた。

そんなある日 (X 年 Y 月 10 日), B から筆者に A の情報がもたらされた。筆者自身が、かねてより GID やエスニックグループ (人種の少数派 ; 宮内, 2005) などマイノリティの人々の社会参加や生き様に関心を持っていたこともあり、B を介して A に対するメールでのインタビューを依頼した。インタビュー目的は、GID という生来の生きにくさを抱えつつも、現在という現実の世界を生き抜いている A をありのまま知るという極めて単純なものである。それは、一方ではセクシュアルマイノリティである A を理解することが、この世に生を受けた多くのマイノリティたちを等身大に理解するための大きな手がかりとなるのではないかという率直な動機に基づいている。

そこで、インタビューを開始するに当たり、筆者から A に、筆者の性別、年齢、略歴、現在の所属先や専門領域を紹介すると同時に、所期の目的を達成するための貴重な情報としてメール内容を利用させてもらう可能性があることを告げた (Y 月 25 日)。それに対して、A から「俺たちに對する世の中の偏見をなくしたいので喜んで協力させてください」との快諾を得た。

A とのメールのやりとりは、約 3 ヶ月間行われ、その回数は、筆者から A が 31 通、A から筆者が 33 通であった。

A に関する生育歴の概要は表 1 に記した。作成にあたっては、A からのメール及び約 1 年前

表1 Aの生育史の概要

現在20歳代。女性の体を持って生まれたが、物心つく頃から、スカート履くこと、長髪にリボン姿が嫌でしかたなかった。また、6歳年上の兄について回り、立ちションなど兄の真似ばかりしていた。小学校2年の時に、母より女であることを告げられショックを受け、それ以来、女性である自分に違和感をもつようになった。中学生になると、親に無断で短髪にし、制服のスカートの下には必ずジャージを身につけた。さらに、母親との葛藤が表面化するようになった。中学3年生の時に年下の交際相手（女性）と交際するようになったが、約1年で交際相手に男性の恋人ができふられてしまった。そのことがショックで、以降の恋愛には臆病になった。高校生の時に、友人に性同一性障害のサイトを見せてもらい、自分との共通点の多さに驚くとともに、初めて自分がセクシュアルマイノリティであることを確信した。医学的診断や治療は受けていない。

からネット上に掲載されているAのブログを利用した。

分析材料

インタビューの初期にあたるX年Y月25日～Y+1月8日までの約2週間の間に交わされたAと筆者のメール内容（筆者からAが13通、Aから筆者が11通）、及び筆者がその都度感じ、書きとめてきた内省資料を用いた。また、補足資料として、Aが私的に運営しているブログの日記を参照した。

分析の視点

中立的なインタビューであることをわきまえていたにもかかわらず、筆者はAからのメールに様々な感情を体験した。こうした感情は、ある時にはAに対する一方的な思いこみを誘発し、またある時はA理解に促進的に関わった。

本稿では、こうしたその都度の感情体験を逆転移として位置づけ、逆転移内容と筆者の中に立ち現れたAイメージの変遷を双方のメール内容及び筆者の内省資料をもとに分離的記述法（Emerson, Fretz, & Shaw., 1995佐藤・好井・山田訳2000）で紹介する。

尚、プライバシー保護の目的から、本稿におけるメール記述に関しては、内容の趣旨を損なわないよう留意しながら一部変更を加えた。

結果及び考察

本文の記載にあたって、文中の「」は筆者からAへのメール内容、『』はAから筆者へのメール内容、“ ”は筆者の内省資料にもとづく感情を示す。

1. 逆転移の形成

Aとのメールを開始する当初から、筆者という存在が、性同一性障害と自認するAに受け入

れられるのが当面の課題であった。筆者は事前にGID関連の文献を読み（例えば、吉永，2000）、細心の注意とともにメールを送った。

《筆者からAへ》#1：Y月25日

君のブログで半生を読ませていただきました。人がその人らしく生きることというのは、思うほど楽じゃないということを再確認しました。行きにくい世の中によくこそ、という感じです。・・・人の生きにくさという、ある意味ではとてもデリケートなところに触れる限りにおいては、私たちは結果的に相手に不快が生じないよう最大限の注意とリスペクトを持っておくべきではないかと考えています。（筆者の自己紹介）今後私とのメールが可能でしょうか？

このようにAという存在をひとまず脇に置き、様々な文献から抽出された「実際の性別と性自認が合致しないためにこの世に生きにくさをもった当事者」という大きなくくりとしてAを理解し、その理解を伝えることで今後のやりとりにおける了承を求めた。そこにおける筆者の感情は、“好奇心”“切なさ”“同情”でありメールを承諾してもらえるかどうかの“不安”でもあった。

しかし後述するように、Aを抜きにしたこの文献理解が後々のA理解に大きな障害となったのも確かである。このメールに対するAの返事は以下のとおりであった。

《Aから筆者へ》#1：Y月25日

初めまして。メールしてくれてありがとうございます！

俺の場合は半生でたくさんの経験とたくさんの感動をもらいました。俺は友だちにたくさんの勇

気をもらいました。友達は俺のことを女として見るんじゃない、かといって男として見るんじゃない、一人の人間として、AはAとして見てくれます。友達といるだけで俺は安心できるんです。でも、感動と同じくらい毎日辛いです。なぜなら親が偏見を持っているからです。俺は毎日毎日母親から髪の毛を伸ばせ、性格を直せと言われます。ノイローゼっていうほどでもないと思いますが、俺自身は耐えきれなくなってくるんですよ。俺に聞きたいことがあったら何でも聞いてください。何でも答えますから！

《Aから筆者へ》#2：Y月26日

(略) 大丈夫ですよ。俺の目標は少しでも日本(世の中)の偏見をなくしていくことです。協力させてもらいます。というか協力させてください。

筆者はこのメールに“安心感”を憶え、今後のやりとりに手応えをもった。また同時に、Aの家庭における居づらさにも思いをはせ、まさに「生きにくい」境遇の中をけなげに生きているAの姿に強い“同情”“哀れみ”の気持ちを抱いた。同時に、今すぐにでもAの力になれることはないかという“焦り”にも似た感覚を抱いた。しかも、Aはそのことをこそ筆者に訴えかけていると感じた。しかし、不思議なことに、筆者の中では、Aのもう一方の適応的側面、つまり友人との関わりの中で『AはAとして』『一人の人間として』安心して生きているという側面は完全に無視されていた。

この段階における筆者のAイメージは、若いながらも「生きにくい」この世の中でけなげに男性として生きようとする姿であり、そこに“悲壮感”すら漂うというものであった。それは先述したように、主として多くの文献から示唆された異なった性を生きるというGID当事者たちの悲しみに満ちた生き様の一側面から筆者が構成した一般的GIDイメージを引きずったものであり、Aの適応的側面をも加味した全体的理解とはほど遠い内容である。

Heimann (1950 椋田訳2003)、松木 (1989) は、精神分析セッティングにおいて分析家が患者に対して経験する全ての感情を逆転移とした。また、

そうした逆転移は、患者が分析家にコミュニケーションしてきているもの(つまり患者の内的世界)を表すと同時に、分析家自身の現在に至るまでの連続した体験、感情に基づいているとも述べている。

筆者の中のAに対する様々な感情、それに基づくAイメージは、日常生活場面、それもメールのやりとりというきわめて限定されたインタビュー状況ではあるが、Heimann、松木の定義する筆者の側の逆転移と言い換えてもさしつかえなからう。

このように、インタビュー前のGIDイメージやわずか2回のメールで筆者の中には、逆転移に基づくAイメージが形成されていた。

2. 逆転移によるAの一面的理解

こうした逆転移の中で、筆者の関心事は、今、ここでAの物語る「生きにくさ」の歴史を知ることであり、介入することであった。

《筆者からAへ》#4：Y月29日

(略) 今改めて感じているAくんの人となりについて質問させてください。Aくんが、自分自身を異なった性をもった人間と感じ始めた頃について、その時期やエピソードについて。

この問に対するAの反応は、非常に長いメールとして返ってきた。それは、筆者の逆転移を増長させるものであると同時に、A自身が筆者の中に彼のつらさや苦しさを投げ込んでくる姿とも取れた。

《Aから筆者へ》#3：Y月29日

俺自身が異なった性と感じたのは本当に小さい頃からでした。俺には6歳上の兄がいます。俺は兄の真似ばかりをしていました。俺自身それが普通だと思っていました。ただ、不思議に感じていたことが1つありました。それがスカートです。兄は履かないのにどうして俺には履かすのだろう?? スカートを履くたび泣いて嫌がってたみたいです。母が言ってました。小学2年生の時まで、俺は立ちションしてました。立ちションしていたら兄みたいに生えてくるって真剣に思っていました。でも、母にばれたときにとっても怒ってしま

た。そんな時に初めて女の子のことを聞かされました。聞かされた瞬間何も言えなかったですね。ただ、ただ、黙っていたと思います。悲しかったというより認めたくなかったですね。丸みを帯びてくる体、胸があり生理が始まり、自分自身苦痛でした。胸を目立たせたくなかったから背中を丸めて歩いていました。・・・中学校に入ってから女の子を守りたいそう思うようになりました。そして初カノができました。嬉しくて男に見えるように毎日努力をしていました。あとこの時に初めて髪の毛を短くしました。嬉しくてテンション上がったのを覚えています。

高校生。スカートの下にズボンをはかず履いていました。性同一性障害って言葉を知らなかったのでも、無理して自分を変えようとしていた時期でもあります。初めて彼氏をつくりました。好きかどうかは分かりません。彼女に振られてヤケクソになっていた時期でもあります。・・・友達に性同一性障害のサイトを見せてもらった時、正直びっくりしました。俺と同じと思いましたね。サイトを見つけてから彼氏と彼女はつくったことではないですね。ただ、好きになるのは女の子です。自分の体をちゃんと見れないですね。見てしまうと吐き気が襲ってきて叩きます。お風呂も嫌いです。見られたくないです。長くなりましたね。全部見えましたか？

筆者の逆転移に呼応するかなのようなメールに、筆者はやりきれない“悲しみ”と“苦痛”を感じた。A にとっての人生は、生まれたと同時に悲劇そのものとまで思えた。加えて、ブログ日記の『もうノイローゼになりそう』との記載や A と筆者の以下のメールのやりとりは、さらなる筆者の A に対する一面的理解を深めた。

《筆者から A へ》# 5：Y 月 30 日

(略) 本当に小さいときから、違和感と言うよりもリアルに男性であったわけですね。なのに、身体は確実に女性になっていく。とまどいを通り越して、さぞ苦痛だったと察します。

《筆者から A へ》# 6：Y 月 30 日

今日初めて、ブログの日記を読ませていただきました。ただ心配なのは、A くんのもうノイロー

ゼになりそうという言葉です。

《A から筆者へ》# 5：Y + 1 月 1 日

(略) ノイローゼの方はですね。我慢しすぎた結果だと思います。俺の母は俺を女の子の子させようと頑張ってきました。今もそれは続いています。小さい頃から、髪の毛を伸ばし、スカートを履かせ、人形遊びをさせようとしてきました。俺はその全てが嫌でした。母と正反対のことをやってきました。髪の毛も中学 1 年生までは長く毎日母にくくられていました。しかし、中学 2 年の時に髪の毛をばっさり切ったとき、俺は喜び母は怒りました。そこから母の怒りが始まりました。髪の毛を伸ばせと言ってきました。私服も「女らしくしろ」と言ってきました。性格も男っぽいから怒り、行動も言葉遣いも全てにおいて俺を直そうとしました。まるで生まれたての赤ちゃんのように。俺は家にいるときビクビクしながら過ごしています。何を言われるか分からないからです。俺が一言喋るたびに反論し嫌みを言われます。最近家は家にいたくないので友達と遊んだりして、家の時間を減らしています。それでも言われてしまいます。最近俺は家で笑ったことがないです。ビックリですよ。でも本当のことなんです。

《筆者から A へ》# 7：Y + 1 月 1 日

(略) A くんは男性であることが当たり前ののに、最も身近な母親から否定されている。うーん、絶句です。

これまでの生い立ちや家庭でのエピソードは、A の我慢の限界を通り越しているかのようであった。同時に、筆者は、そうした A の境遇に対する“怒り”や何もしてあげられない“無力感”をも味わうことになった。

心理療法という間主観的場で繰り返される言語のやりとりによって、クライアントはその都度新たな自己物語を産出し、そのことが心理療法の治癒機転になりうるということが示唆されている(安達, 2008)。わずか 1 週間程度のメールにもかかわらず、今や、A の自己物語は、異なる性に生まれてきたが故に家庭からも自分自身の身体からも疎外された悲しみに満ちた矮小化された自己であると、少なくとも筆者は確信した。

3. 逆転移によるエナクトメント

そんな矢先、自分のことを理解しようとしな
い母親とのいささかのトラブルに動揺した A は、
その揺れる心情とともに、以下のような疑問を
メールとして寄こしてきた。

《A から筆者へ》#6: Y+1月2日

(略) カウンセリングはクリニックから行った
方が良いんでしょうか？

筆者の知りうる限りでのカウンセリングのシス
テムや受けるに当たっての留意点を知らせ(《筆
者から A へ》#9), A の所在地近辺にある GID
専門外来がある医療機関を紹介した。

《筆者から A へ》#10: Y+1月3日

C 大学附属病院に電話してみました。GID の
専門外来はないそうです。そこ以外だと D 大学
病院で、GID の診断治療がおこなわれています。
ただし、紹介状が必要です。ですので、まず近く
の精神科(心療内科)クリニックに行って事情を
話してから紹介状をもらうのが良さそうです。そ
の他、私のネットワークで情報を収集しています。
今しばらくお待ち下さい。

Jacobs, T. J. (1986) は治療者の意識的、無意
識的な動機が行動として表現される現象を逆転移
の行動化(countertransference enactment; 以
下エナクトメント)とした。筆者は、以下の A
からのメールにより、A の役に立ちたいと思
いから“焦り”が誘発され、インタビューの枠を
超えたエナクトメントを起こしてしまっている。

こうした筆者の行動からも、強固な逆転移が、
筆者の全体的な A 理解の阻害とインタビューと
しての枠組みの部分的崩壊を招いてしまっている
ことが伺える。

4. 総合的理解に向けて

ここに来て A からの以下のメールは、筆者の
逆転移によるエナクトメント、その背後にある
A の一面的理解を自覚させるものとなった。

《A から筆者へ》#8: Y+1月3日

先ほど母に一人暮らしのことを言ったら、何を
焦っているの。もう少し冷静になりなさいと言わ
れた。確かに焦っていました。自分の人生だから
ゆっくり考えなきゃいけない。後悔のない人生
を過ごさなければいけないと思い、反省しまし
た!! 母はいつもいいことを言ってくれるから感
謝しています。だから、カウンセリングも焦ら
なくていいんですね! パソコンとかでいろいろ
調べて、1 番自分にあっているとこで診察受けて、
ゆっくり自分らしさを見つけていきます(^ ^*)。
病院とかいろいろ調べてくれてありがとうございます
m (_ _) m。

筆者は、筆者の“焦り”をたしなめるかのような
絵文字の入ったメールによって目の覚める思い
がした。同時に逆転移の存在、それ故の軽はずみ
な行動に、A に対する“申し訳なさ”や“恥ず
かしさ”をも味わった。筆者はもう一度 A と正
面から向き合おうと以下のメールを送った。

《筆者から A へ》#11: Y+1月4日

とても落ち着いたメールですね。お恥ずかしな
がら、私の方が焦っていたように思います。お母
さんの言葉にもしっかり耳を傾けていますね。後
悔のない人生ってこういうことを言うんでしょう
か。焦らず、粘り強く、自分が納得するまで決断
を下さない。一人暮らしもカウンセリングも、A
くんの言うようにゆっくりでいいんですね、きっ
と。

それに対する A の返信は、自立を巡る葛藤を
意味する内容であった。

《A から筆者へ》#9: Y+1月6日

(略) やっぱ友達っていいですね(∩∪^*)。
相談もいろいろのってくれたりして。俺のやりた
いこと、これから始めていくことを応援してくれ
ていきます(^ O ^) /。マイペースに頑張っ
ていきますね。よく友達がメールくれたりするの
で、冷静になることができるんですね;;。友達
がいなかったら、と思うと怖いんですね;;。俺の母
は理想が高い上に教育母です。小学生の頃は毎日

習い事でした。何よりもイヤだったのがピアノです。発表会とかになるとスカートを履かせられてましたから。俺は生まれてから何もかも母に従ってきました。学校も母が決めました。〇〇の学校に行きたかったのに文句を言われ母の言いなりになりました。別の仕事をしたいと言ったらまた文句を言われるので言えないんですよ。苦笑。高校の時から誰にも指示されず自由になりたい。そう思うから早く一人暮らしがしたかったんだと思います。焦ったりしていたんだと思います。

青年期ならではの葛藤でもあり、また「生きにくさ」を持っているが故の焦りであることも自覚した内容である。筆者は、筆者側の“焦り”という感情をAに開示することによって、Aの側から友達によって支えられることで『冷静』でいられる体験が報告された。と同時に筆者はAの健康的な姿に改めて目が向くようになり、Aとの気持ちの通じ合いを感じた（“安堵感”）。

さらに、これまでのメールのやりとりを読み返すうちに、筆者の中で一つの疑問が浮上してきた。Aは本当に男性になりたいのか？Aからのメールに何度も登場する『俺は俺らしく』という言葉の意味する内容を、これまでの筆者は完全に無視してきたのである。

《筆者からAへ》#12：Y+1月6日

友達がAくんの大きな支えになっているのがよく分かります。いずれにしても、「後悔しない」「マイペース」を合言葉に、夢が一つずつ叶っていくことを心から願っています。久しぶりに一つ質問いいですか？今の心境として、Aくんは自分を何者だと考えていますか？

《Aから筆者へ》#10：Y+1月6日

（略）俺の心境ですか。最近は自分の声が嫌いでわざと声を枯らしたり低く出すようにしています。男ホル（男性ホルモン；筆者注）を打ちたい。そう思うようになりました。GIDだとは思いますが。GIDに近い同性愛ですかね？まだよくわかりません。だけど、昔から風呂は嫌いでした。自分の体が見れなかったですね。裸になるのが嫌いだったんで、お風呂も15分ぐらい。鏡で絶対体を見ないようにしてましたね。

これはいまだに続いています。あと、胸を潰したりしていると安心します（´ー`）。胸だけは本当にいらくないですね。

《筆者からAへ》#13：Y+1月8日

メールありがとうございます。GIDなのか同性愛なのか。まっ今すぐ決めないといけない訳でもないで、これから追々ということ。私の中では、Aくんは、性別を超えた一人の人間として、心の中に収まるようになってきています。

《Aから筆者へ》#11：Y+1月8日

カム（カミングアウト；筆者注）した友達は、俺を男としてじゃなく、女としてじゃなく、俺は俺として扱ってくれています。それで俺が一番素でいられるんです。先生（筆者）は、俺を一人の人間としてみてくれて、応援してくれて。そう思うと嬉しくてたまりません。・・・「性別」という言葉は、俺にとって敵でありイライラする言葉です。俺は基本「男」にも「女」にも〇を付けないです。よっぽどのことじゃない限り。俺にとっての今の苦痛は履歴書ですね。「女」に〇を付けないといけないから。これが現実か、そう思うと悲しいです。今のところは体型、特に声を変えたいです。頑張っているつもりだけど、いざとなったら高い声が出たり、地声が出てしまったりするんです。男ホル以外には今はやりたくないですね。体は傷つけたくないで。

Aの男性志向は明らかなようでもあるが、しかしAは自己を『GIDに近い同性愛』と暫定的に位置づけている。しかも、性別適合手術は『体は傷つけたくない』として、忌避している。

このように、今回のメールのやりとりから言えることは、Aは性別の特定を望んでいるのではなく『俺は俺として』『一人の人間として扱って』くれることをこそ望んでいるということである。それは、これまでの友達との交流がAにとって最も『素』でいられる時間であり、Aがこの世の中に唯一安心していられる場であることを意味している。

少なくとも、Aと筆者の間で生成されたAの自己は、ここに至ってようやく、悲しみに満ちたAイメージと、友人関係の中で安心して素でいられる適応的なAイメージとが統合されたと

ころの『一人の人間として』のAであり、筆者の安易な思いこみを数倍も超えた力強い生き様を持ったかけがえのない存在であった。また、Aの筆者理解も『俺を一人の人間としてみて』くれる存在である。

以降のメールのやりとりは、友人関係によっていかに『一人の人間である』Aが支えられているかの傍証であり、性別を超えた一人の人間としてAが必死に生きようとする個々の生活における躓きと力強く生きようとする青年期にある一人の若者の語りであった。

総合的考察

1. 逆転移について

本稿で筆者は、短期間に生じた筆者のインタビューイメージの変遷について、筆者の逆転移物語の観点から質的分析を試みた。筆者にとり、自らをGIDと称する若者とは初めての関わりであった。そこで筆者は多くの文献やAのメールや日記から「異なる性に生まれてきたが故に家庭からも自分自身の身体からも疎外された悲しみに満ちた矮小化された自己」という部分的対象理解に縛られた。またこうした理解は、Aの自己理解をも規定し、Aからのメールやブログにおける日記内容（例えば、『Aから筆者へ』#3）は、明らかに過去から現在にいたる悲しみの自己物語の表出であった。

こうした逆転移は、西園（1998）のいう「患者の悩みに過度に同情する」という形のものである。同時に加藤（2008）が報告する、特に面接初期に生じやすい逆転移でもある。そのあたりのいきさつを詳細に検討してみたい。

筆者は初めて関わりを持つという状況に過度に反応し、GID当事者に関する文献を多数読むことで円滑なインタビューを心がけたのである。しかし、こうした事前学習が、彼らの持つ生きにくさへの同情を増長させ、インタビュー以前からすでに筆者の心の中にはAをこの枠組みから見ようとする思惑が働いていたことが分かる。筆者からAに対する初回メールには、そうした筆者の心情が端的に表れている。さらに、その後のやりとりから筆者の中には、こうしたAの境遇に対する“怒り”“無力感”が生じたのである。その

結果が、Aに対する部分的理解であり、約1週間のAとのやりとりは、専らAの悲劇の半生を相互が確認し合う内容であった。また、それに引き続く“焦り”の気持ちから筆者はエナクトメントを引き起こすことともなった。

特に“怒り”“無力感”といった陰性感情は、Racker（1968 坂口訳 1982）のいう補足型同一視（complementary identification）に由来する逆転移、さらには間接的（indirect）逆転移である。この態度は、Aの中にある一方の側の感情、つまり家族や身体そのもの、さらには社会に対する「怒り」、その中で我慢せざるを得ない“無力感”を代弁するものとなっている。こうした逆転移への無自覚が、筆者の中立的な態度を損なうこととなったのである。

さて、初心者や面接初期に生じやすいこうした逆転移について、遠藤（2003）は、「毒」となる逆転移と「薬」となる逆転移という比喻を使って、分かりやすく解説している。言うまでもなく、筆者の逆転移は治療面接であれば中断にも繋がりにかねない「毒」となる逆転移である。一方、セラピストが心の色眼鏡に気がつき、クライエントのありのままの感情をそのまま自己の感情として体験する場合（共感）をRackerのいう融和型同一視（concordant identification）に由来する逆転移とし、「薬」となる逆転移と説明している。

筆者がAを、こうした融和型逆転移の中で見ることができるようになった転機が、『確かに焦っていました。；#8』との言葉であった。筆者は、筆者の中にある“焦り”や“怒り”“無力感”の感情に気がつくと同時に、ようやくAと気持ちが通じ合えたような“安堵感”を抱いている。ここに至って、ありのままに他者を理解するということは、彼ら自身や彼らを取り巻く様々な状況に内在する種々の幸や不幸をそのまま理解することである、というありきたりな結論が抽出されたのである。そして、この結論には従来の逆転移理論と筆者の心情、あるいはAのメール内容との多層的対話が基礎となっていることは言うまでもない。

今回試みたミクロな分析は、日常の臨床ではともすれば見過ごされがちな今、ここでの逆転移を理解する上で非常に有用であった。Rackerも、

一つ一つの文章，細かな断片，筋道といったものを丹念に理解する微視的接近法と，一回ごとのセッションの要点や数回のセッションをまとめて理解する巨視的接近法とが併せ用いられることの重要性を指摘している。

2. 質的研究をおこなう意義について

今回の分析で筆者がおこなったメール内容や内省資料を読むという行為は，やまだ（2007）の言う言語を介在とした相互行為のレベルと実在レベル，さらには，テキスト・レベル間における対話行為でもある。筆者は，A とのメールのやりとり（相互行為レベル）から A 自身の現前にはない（過去の）出来事（実在レベル）を推測し，そこから筆者自身の A イメージという脱文脈化されたテキスト（テキスト・レベル）を生成するという対話を繰り返したのである。そして，こうしたナラティブの相互的対話と，さらにモデル・レベルとしての逆転移理論との対話によって，演繹的に A イメージの歪みを理解したとも言える。さらに興味深いのは，A 自身の中でもこうした対話行為が進行し，A の『先生は，俺を一人の人間としてみてくれる；#11』という筆者イメージが生成されるといった相互性の発見であった。

こうした側面は，臨床場面における転移・逆転移の分析に，質的研究としての対話的モデル構成法が有用であることを示唆するものであろう。今後は，臨床場面にも応用し，微視的レベルにおける転移・逆転移の様相について検討を加えたい。

《追記》

今回の発表に快く応じていただいた A さん，ご多忙中，査読いただいた学内外の先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 安達圭一郎（2008）．物語行為と心理療法 九州ルーテル学院大学紀要 VISIO, 37, 23-28.
Emerson RM, Fretz RI, & Shaw LL (1995). *Writing ethnographic fieldnotes*. Chicago, The University of Chicago Press.
（エマーソン，RM，フレッツ，RI，& ショウ，LL. 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋（訳）（2000）．方法としてのフィールドノー

- ト 新曜社）
遠藤裕乃（2003）．ころんで学ぶ心理療法－初心者のための逆転移入門 日本評論社
Freud S (1910). *Die zukünftigen Chancen der psychoanalytischen Therapie*. Internationaler Psychoanalytischer Verlag.
（フロイド，S. 小此木啓吾（訳）（1983）．精神分析療法の今後の可能性 フロイド著作集（9）人文書院 pp 44-54.）
Heimann P (1950). On counter-transference. *International Journal of Psycho-Analysis*, 31, 81-84.
（ハイマン，P. 椋田容世（訳）（2003）．逆転移について 松木邦裕（編・監訳）対象関係論の基礎－クライニアン・クラシックス 新曜社 pp 173-190.）
Jacobs TJ (1986). On countertransference enactment. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, 34, 289-307.
加藤志ほ子（2008）．性を取り扱う女性サイコロジストの逆転移 臨床心理学, 8 (3), 378-382.
松木邦裕（1989）．逆転移について 精神分析研究, 33 (3), 155-160.
宮内洋（2005）．体験と経験のフィールドワーク 北大路書房
西園昌久（1998）．逆転移の今日理解 精神療法, 24 (6), 525-530.
Racker H (1968). *Transference and countertransference*. London. The Hogarth Ltd.
（ラッカー，H. 坂口信貴（訳）（1982）．転移と逆転移 岩崎学術出版社）
莊島幸子（2008）．「私は性同一性障害者である」という自己物語の再組織化過程－自らを「性同一性障害者」と語らなくなった A の事例の質的検討 パーソナリティ研究, 16 (3), 265-278.
やまだようこ（2006a）．質的心理学とナラティブ研究の基礎概念－ナラティブ研究の基礎概念－ナラティブ研究の基礎概念－ナラティブ・ターンと物語的自己 心理学評論, 49 (3), 436-463.
やまだようこ（2006b）．非構造化インタビューにおける問う技法－質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス 質的心理学研究, 5, 194-216.
やまだようこ（2007）．質的研究における対話的モデル構成法－多重の現実，ナラティブ・テキスト，対話的省察性 質的心理学研究, 6,

174-194.
やまだようこ (2008). 多声テキスト間の生成的
対話とネットワークモデルー「対話的モデル
生成法」の理論的基礎 質的心理学研究, 7,
21-42.

吉永みち子 (2000). 性同一性障害ー性転換の朝
集英社新書

(2011.11.30 受稿, 2012. 3 . 6 受理)

Interviewer's countertransference and understanding interviewee image occurring in an early interview session. ー From qualitative study of E-mails corresponding with an adolescent who recognized him/her self as having “Gender Identity Disorder”

Keiichiro ADACHI

This study was proposed to clarify how interviewer's countertransference and interviewee image changed through exchanging E-mail with an adolescent (A) recognizing him/her self “Gender Identity Disorder” (GID: female to male) in an early interview session. Because it was the interviewer's first time to have contact with such an individual, prior to the interview interviewer read many articles concerning GID. Interviewer imagined A as a so-called general GID patient, feeling his/her life should be hard in needy circumstances. Afterwards, interviewer's indirect countertransference influenced understanding of A and formed a partial image of A connected with interviewer's feelings (i.e., impatience, helplessness, and anger). Moreover, this situation caused partial destruction of interview setting and facilitated interviewer's enactment. However, taking advantage of E-mail from A, interviewer was conscious of the countertransference feelings and could understand A as a whole person. This process was qualitatively studied and discussed in consideration of Methodology of Dialogue Model Construction (Yamada, 2007).

Key words: countertransference, interview, qualitative study